

# 『廻諍論』六句議論における問題点

児玉瑛子

## 1 序

『廻諍論』(Skt. *Vigrahavyāvartanī*, Tib. *rTsod pa bzlog pa*) は、中観思想史の起点となった人物、ナーガールジュナ (Nāgārjuna, 龍樹, 150-250 頃) に帰せられる論書である<sup>1)</sup>。70 の偈頌<sup>2)</sup>と著者の自註とされる註釈からなり、そのうち第 1-20 偈が実在論者からの反論 (*pūrvapakṣa*)、第 21-70 偈が空性論者 (著者) による答論 (*uttarapakṣa*) である。一次資料はサンスクリット写本 1 本 (12 世紀初頭)、チベット訳 (9 世紀初頭)、漢訳 (6 世紀中頃) が現存しており、多数の校訂テキストや翻訳研究が出版されてきた (塚本 1989: 118-121)。

本稿で扱う「六句議論 (*ṣaṭkoṭiko vādaḥ*)」は、『廻諍論』第 2 偈に対する註釈、すなわち実在論者からの反論に含まれている。ここで実在論者は、空性を批判するために 6 つの支分で構成された議論を展開する。この六句議論の解釈は先行研究において一定せず、次項で詳述するような、テキストと解釈それぞれに関する問題が依然として残されている。そこで本稿では、これまでの先行研究の成果を今一度整理し、その問題点を明らかにする。そして、六句議論全体の構成について一考察を示しつつ、六句議論の解明にむけて基盤となるテキストの問題を解決したい。

なお、本稿において提示する『廻諍論』のサンスクリットテキストは、原則的に Johnston と Kunst による校訂本 (1948-51)<sup>3)</sup> を底本とする。特に出典の明示されていない和訳は筆者による訳であり、訳中の ( ) は言い換え、[ ] は補足を表す。

## 2 六句議論における2つの問題

今日、『廻諍論』の最も標準的なサンスクリットテキストとなっているのは Johnston 校訂本である。しかし、このテキストには不要な訂正と考えられる箇所が少なからず見受けられ、米澤 (1991: 411-410) および Yonezawa (2008: 212) によって詳細に指摘されている。そうした Johnston 校訂本の問題箇所は、六句議論の中にも含まれる。具体的には、6つの支分で構成される六句議論のうち、Johnston は第2句の一部をサンスクリット写本およびチベット訳に反し訂正している。この訂正が真に適切であるかが第一の問題となる。

そして第二に、解釈の問題が生じる。六句議論は『廻諍論』の中でも特に難解な議論であり、なぜこのような形式で議論が構成されているのか判然としない。ナーガールジュナが得意とする論法・四句分別 (catuḥkoṭi) の派生形と考えたとしても、それが対論者の反論において、敢えて「六句議論」と称して用いられるのは不自然ではないだろうか。

そのため、ナーガールジュナの主要な論敵であり、かつ『廻諍論』においても対論者と見なされるニヤーヤ学派との関係が疑われている。ニヤーヤ学派が根本聖典とする『ニヤーヤスートラ』(Nyāyasūtra, 2世紀頃)には、同じく6つの支分からなる議論が見られる。これはヴァーツヤヤナ (Vātsyāyana, 350-450年頃)による註釈『ニヤーヤバーシュヤ』(Nyāyabhāṣya, 4世紀後半頃)の中で「六主張議論 (ṣaṭpakṣi)」と名づけられている。しかし、六句議論と六主張議論は同じ6という数字からなるものの、議論の形式は異なっており、両者の関係の有無について未だ確たる説はない。以下に、六句議論に関する先行研究を簡単にまとめておこう。

『廻諍論』における六句議論の解釈について、初めて詳細に検討したのは山口 (1950a: 7-9) である。山口は、六句議論を肯定・否定の対句から構成される点で四句分別と同様の論法と解釈する。しかし、この時すでに六句議論は『ニヤーヤスートラ』の六主張議論と類似するものとしても指摘された。山口は六主張議論の名称に言及したのみで両者の比較までを行ったわけではないものの、この指摘をもとに以降多くの研究がなされている。

両者の比較研究において大きな難点となるのは、六主張議論が対論形式であるのに対し、六句議論が対論者からの一方的な批判であるという形式の相違である。その解決のため、梶山（1984: 28-32）のように、六句議論を六主張議論と同様の対論形式へ書き換える試みもなされてきた。梶山は、「ナーガールジュナが *ṣaṭkoṭiko vādaḥ* と呼んでいる点で、*vāda* という以上、これは対論者を予想しての議論であって、独り言ではありえない。」と主張し、六句議論に「『ニヤーヤストラ』と同一の論理過程が内在しうる」と結論づけている。

また、原田（1976）は形式の相違を認めながらも、六主張議論から六句議論への影響を強く認めることができると述べる。その根拠として、1. 六句議論と六主張議論は共にその末尾に「6種の誤謬を脱する為には、特別な理由<sup>4)</sup>を述べねばならない」と論じていること、2. 『廻諍論』第4偈に六主張議論との用語の類似や、論理的に同一と見られる箇所がある、という2つが挙げられている。

このように、明確な関連性を導くには至らなくとも、両者の間に何らかの共通点を認める説がある。しかしながら、Bhattacharya（1978: 7）は六句議論と六主張議論は無関係であるとするなど、否定的な解釈もあり一様にはいえない。

また一方で、石飛（2006）は梶山が六句議論を六主張議論の論理を用いて解釈したことを批判し、『方便心論』にあらわれる六句議論との比較を試みている。石飛は『方便心論』と『廻諍論』はともにナーガールジュナ真撰であると考えているため、「『廻諍論』の六句議論の意味するところを知りたいのなら、龍樹がもっている論法によって解釈されねばならない」と主張する（石飛 2006: 171-172）。

『方便心論』の六句議論については、初めに宇井（1965: 560-567）による研究がある。それは『方便心論』「弁正論品第三」における3支ずつの立論・反論からなる議論を、『ニヤーヤストラ』六主張議論と比較したものである。両者の大きな相違は勝敗の決し方にある。『方便心論』では第2番目の論者が勝利する正しい議論の方法とされるが、六主張議論では両者が敗北に陥り引き分けとなってしまう。この相違をどのように捉えるかについても、

『廻諍論』六句議論との比較における1つの論点となるだろう。ただ、比較対象こそ異なるものの、『廻諍論』六句議論が対論形式に書き換え可能であるという解釈に限って言えば、梶山説と石飛説は大きく隔たっていない。

以上、『廻諍論』六句議論に関する先行研究を概観した。ここで筆者が強調したい点は、Johnston 校訂本を参照していない山口(1950a)を除き、解釈の問題を扱う先行研究において、第2句の訂正が全く問題とされなかったことである。Johnston 校訂本の問題そのものは前述の米澤(1991)等によって指摘されるが、六句議論の解明を主眼とした先行研究はいずれもJohnston 校訂本に従っている。本来であれば第一に論じられるべきテキストの問題が未だに検討されていない。よって、筆者は六句議論の解明における最重要課題は、このテキストの問題を明らかにすることだと考える。

### 3 『廻諍論』第2偈における議論

六句議論の註釈対象である『廻諍論』第2偈は、第1-4偈における一連の議論の中に位置づけることができる。そこで主題となっているのは、空性論者の空なる言明である。实在論者は「すべてのものは空である」という空性論者の主張を想定し、空性論者の言明が空である場合の種々の過失を指摘する。そのような批判に対し、著者は第21-29偈において空性の意味を説きながら答える。この議論のアウトラインを以下の表に示そう。

【实在論者の反論】	【空性論者の答論】
[空なる言明の否定] (第1-4偈)	[空性の説示] (第21-29偈)
空なる言明による本性の否定の否定 (1)	本性の否定による空性の成立 (21) 空性の意味と因果効力 (22) 幻術師と幻人の喩え (23)
空なるすべてのものと否定する言明における矛盾 (2)	空なるすべてのものと否定する言明における無矛盾 (24)
禁止 (mā) の声による喩えの否定 (3)	禁止の声と空なる言明との相違 (25) 空なる言明による本性の否定 (26) 変化の女性の喩え (27) 疑似理由と二真理説 (28)
实在論者の言明における否定の効力 (4)	空なる主張における無過失 (29)

これらの議論の中から、ここでは六句議論の前提となる第2偈と、それに先行する第1偈の内容を確認する。まず第1偈では以下のように、空性論者の空なる言明による本性の否定、すなわち空性の成立が実在論者によって否定される。

sarveṣāṃ bhāvānāṃ sarvatra na vidyate svabhāvaś cet  
tvadvacanam asvabhāvaṃ na nivartayituṃ svabhāvam alaṃ.

(『廻諍論』第1偈)

もしどこにもすべてのものの本性が存在しないならば、本性をもたないあなたの言明は、本性を否定することができない。

この第1偈に対する註釈で実在論者は、「なぜなら、存在しない火によって焼くことはできず、存在しない刀で切ることにはできず、存在しない水によって濡らすことはできないからである。(Johnston1948-51: 109, 2-4: na hy asatāgninā śakyaṃ dagdhum. na hy asatā śastreṇa śakyaṃ chettum. na hy asatibhir adbhiḥ śakyaṃ kledayitum.)」といった喩えを用いる。そして空なる言明も同様に、すべてのものの本性を否定することはできないと批判を展開するのである。

この喩えからすれば、ここに登場する実在論者にとっての「空」とは、「存在しない」ことと同義であるといえる。よって、存在性と相容れない空なるものが、何らかの結果を生じさせることはない。そのような解釈に基づき、「すべてのものは空である」という言明が、本性の否定をなしえないと主張しているわけである。そして、「空なる言明」への実在論者の批判は、それを根拠に展開されていく。続いて、第2偈を見てみよう。

atha sasvabhāvam etad vākyam pūrvā hatā pratijñā te  
vaiśamikatvaṃ tasmin viśeṣaheṭuś ca vaktavyaḥ. (『廻諍論』第2偈)

もしこの言明が本性を伴っているならば、あなたの前の主張は破綻している。それ(言明)には不等性があって、[言明だけが] 区別される理由が述べられなければならない。

第2偈では、第1偈で実在論者から指摘された誤謬を取り除くために、空性論者が「言明は空ではない」と考えた場合の過失が述べられる。第1偈で確認した実在論者の主張に従えば、空性論者の否定を有効とするためには、言明は本性を伴っているものでなければならない。しかしその場合には、「すべてのもの」と述べているにも関わらず、言明だけは空でないことになってしまう。よって、言明と言明以外の他のものが等しくない、つまり不等であるという矛盾が生じ、「すべてのものは空である」という主張が破綻する。そして、その矛盾を解消するためには、言明が他のものとは区別されることについての理由が述べられなければならないという。

以上が、六句議論の注釈対象となる『廻諍論』第2偈の内容である。そして、すべてのものと言明との間にこのような矛盾が生じることを、6つの支分によって述べたものが六句議論である。

#### 4 六句議論全文と空性論者の答論

それでは、いよいよ六句議論の内容に入っていきたい。テキストは既に述べた通り Johnston 校訂本を底本とするが、下線部のみ写本に従う。

【1】 hanta cet punaḥ śūnyāḥ sarvabhāvās, tena tvadvacanam śūnyam sarvabhāvāntargatatvāt. tena śūnyena pratiṣedhānupapattiḥ. tatra yaḥ pratiṣedhaḥ śūnyāḥ sarvabhāvā itī, so 'nupapannaḥ.

【2】 upapannaś cet punaḥ śūnyāḥ sarvabhāvā itī pratiṣedhas, tena tvadvacanaśūnyatvād anena pratiṣedho 'nupapannaḥ.

【3】 atha śūnyāḥ sarvabhāvās, tvadvacanaḥ cāśūnyam yena pratiṣedhaḥ, tena tvadvacanam sarvatrāsaṃgr̥hitaṃ. tatra dṛṣṭāntavirodhaḥ.

【4】 sarvatra cet punaḥ saṃgr̥hitaṃ tvadvacanam sarvabhāvās ca śūnyās, tena tad api śūnyam. śūnyatvād anena nāsti pratiṣedhaḥ.

【5】 atha śūnyam, asti cānena pratiṣedhaḥ śūnyāḥ sarvabhāvā itī, tena śūnyā api sarvabhāvāḥ kāryakriyāsamarthā bhaveyuḥ. na caitad iṣṭam.

【6】 atha śūnyāḥ sarvabhāvā, na ca kāryakriyāsamarthā bhavanti, mā bhūḍ dṛṣṭāntavirodha iti kṛtvā, śūnyena tvadvacanena sarvabhāvasvabhāvapratīṣedho nopapanna iti.

kiṃ cānyat, evaṃ tadastitvād vaiśamikatvaprasaṅgaḥ, kiṃcic chūnyam kiṃcid aśūnyam iti. tasmimś ca vaisamikatve viśeṣahetur vaktavyo, yena kiṃcic chūnyam kiṃcid aśūnyam syāt. sa ca nopadiṣṭo hetuḥ. tatra yad uktaṃ śūnyāḥ sarvabhāvā iti, tan na.

(Johnston1948-51: 109, 18ff.)

【第1句】 ああ、しかしもし、すべてのものが空であるなら、したがって、あなたの言明はすべてのものに含まれるから空である。その空なるもの（言明）によっては、否定が妥当しない。その場合「すべてのものは空である」という否定、それは妥当ではない。

【第2句】 しかし、もし「すべてのものは空である」という否定が妥当であるならば、したがって、あなたの言明は空であるから、これ（言明）による否定は妥当ではない。

【第3句】 もしすべてのものが空であり、かつそれによって否定する、あなたの言明が空ではなくなるならば、したがって、あなたの言明はすべてのものに含まれない。その場合、喩例との相違がある。

【第4句】 しかし、もしすべてのものにあなたの言明が含まれて、かつすべてのものが空であるならば、したがって、それ（言明）もまた空である。空であるから、これ（言明）による否定はありえない。

【第5句】 もし [あなたの言明が] 空で、かつ「すべてのものは空である」という、これ（言明）による否定が存在するならば、したがって、すべてのものは空であっても、因果効力をもつことになるだろう。しかし、それは認められない。

【第6句】 もし喩例との相違があってはならないと考えて、すべてのものが空であり、因果効力をもたない [という] ならば、空であるあなたの言明によって、すべてのものの本性を否定することは妥当ではない。という [6つの] ことである。

【結論】さらにまた、それ（あなたの言明）がこのように実在することから「あるものは空で、あるものは空でない」という不等性に帰結してしまう。また、その不等性について、あるものは空で、あるものは空でなくなるような「言明だけが」区別される理由が述べられなければならない。しかし、その理由は示されていない。その場合、「すべてのものは空である」といわれた、そのことは成立しない。

ここでは仮に、前掲の山口（1950a: 7-9）と同様、第1・2句、第3・4句、第5・6句の2句ずつを、それぞれ肯定・否定によって対となる句として理解してみよう。まず第1・2句では「すべてのものは空である」という否定が妥当であるか否かに着目する。

第1句は、空なるものによる否定が妥当でないことを結論として述べており、およそ『廻諍論』第1偈の内容に一致するとみてよいだろう。それに対し、第2句は第1句と反対に否定が妥当である場合を述べる。仮に否定が妥当であったとしても、すべてのものに含まれる言明も空になるため、結果としては、やはり否定ができないということになる。

続く第3句では、喩例との相違 (dṛṣṭāntavirodha) という語があらわれる。これが第3・4句におけるポイントとなる。まず、第3句で述べられるのは、すべてのものが空で、言明だけが空でない場合である。そのように仮定すると、言明はすべてのものに含まれなくなってしまい、喩例との相違に陥る。この第3句の内容は、『廻諍論』第2偈とよく一致しているといえよう。そして第4句では、第3句で指摘された喩例との相違を受け、すべてのものも言明も空であるとした場合が述べられる。しかし、ここでもまた空なるものによる否定は不可能となってしまう。

次に第5句では、新たに因果効力 (kāryakriyāsamartha)<sup>5)</sup> という語があらわれる。実例との相違に焦点を当てた第3・4句のように、第5・6句ではこの因果効力の観点から2つのケースが述べられる。第5句は、言明が空であるという条件のもと、なおかつ「すべてのものは空である」という否定が存在する場合である。その場合、空なるものが否定という結果を引き起こす因果効力をもつことになる。しかし、実在論者はこれを認めないため、第



5句のケースにも矛盾が生じる。最後に第6句では、第5句とは反対にすべてのものと言明がいずれも因果効力をもたない場合を想定する。すると、やはり空なる言明は本性を否定することができなくなってしまう。

全体を整理すると、六句議論は [A] 「すべてのものは空である (sūnyāḥ sarvabhāvāḥ)」 という言明の妥当性の有無, [B] 喩例との相違 (dṛṣṭāntavirodha) の有無, [C] 因果効力 (kāryakriyāsamartha) の有無, という3種の肯定・否定から構成されていると理解することができる。そして、各句において導かれる結論は、[D] 空なる言明による本性の否定は不可能だということである。以上のA～Dに基づき、各句の構成を簡略に示すと以下の表ようになる。

	A	B	C	D
第1句	妥当しない	—	—	否定不可
第2句	妥当する	—	—	否定不可
第3句	—	相違あり	—	否定不可
第4句	—	相違なし	—	否定不可
第5句	—	—	効力あり	否定不可
第6句	—	—	効力なし	否定不可

ここで重要な点は、六句議論全体を通して、空なるものとは存在しないもの、すなわち、いかなる結果も生み出さないものであるということが實在論者の前提となっている点である。實在論者にとっての空が非存在と同義であることは、前項で述べた『廻諍論』第1偈およびその註釈に示される通りである。

最後に、空性論者からの六句議論への返答を確認しておこう。六句議論の各句に対する詳細な返答はなされていないものの、著者の答論である第23偈の註釈において、六句議論は以下のように破られる。

nirmitako nirmitakaṃ māyāpuruṣaḥ svamāyayā sṛṣṭam  
 pratiṣedhayeta yadvat pratiṣedho 'yaṃ tathaiva syāt. (『廻諍論』第23偈)

化作された [人] が化作された [人] を, 幻影の人が自身の幻影によって作り出されたものを妨げるだろう。この妨げが [可能である] ように, それと全く同じように [空による否定も] あるだろう。

yathā nirmitakaḥ puruṣo 'nyam nirmitakaṃ puruṣaṃ kasmimścīd arthe vartamānaṃ pratiśedhayet, māyākāreṇa vā sṛṣṭo māyāpuruṣo 'nyam māyāpuruṣaṃ svamāyayā sṛṣṭaṃ kasmimścīd arthe vartamānaṃ pratiśedhayet, tatra yo nirmitakaḥ puruṣaḥ pratiśedhyate so 'pi śūnyaḥ. evam eva madvacanena śūnyenāpi sarvabhāvānāṃ svabhāvapratiśedha upapannaḥ. tatra yad bhavatoktaṃ śūnyatvāt tvadvacanasya sarvabhāvasvabhāvapratiśedho nopapanna iti tan na. tatra yo bhavatā ṣaṭkoṭiko vāda uktaḥ so 'pi tenaiva pratiśiddhaḥ. naiva hy evaṃ sati na sarvabhāvāntargataṃ madvacanaṃ, nāsty aśūnyam, nāpi sarvabhāvā aśūnyaḥ. (Johnston1948-51: 123, 6-17)

たとえば化作された人が, 何らかの目的に作用している他の化作された人を妨げることが可能である。あるいは幻術師によって作り出された幻影の人が, 何らかの目的に作用している, 自身の幻影によって作り出された他の幻影の人を妨げることが可能である。その場合, 否定される化作された人も空であり, 否定する [化作された] 人も空であり, 否定される幻影の人も空であり, 否定する [幻影の] 人もまた空である。全く同じように, 空である私の言明によるすべてのものの本性の否定は妥当である。それについて, 「あなたの言明は空であるから, すべてのものの本性の否定は妥当ではない」とあなたによっていわれた, そのことは正しくない。その場合, あなたによっていわれた六句議論, それもまた全く同じ [理由] によって否定される。なぜならば, そのようにあるとき, 私の言明はすべてのものに含まれないのではなく, 空でないのではなく, またすべてのものが空でないのでもないからである。

この第 23 偈は, 第 3 項のアウトラインにも示した通り, 本来は第 1 偈

への反論として位置づけることができる。第1偈に対する一連の答論（第21-23偈）のうち、第22偈は空性の意味と空なるものが因果効力をもつことを説く。そして、上に挙げた第23偈は、その喩えとなる箇所にあたる。

つまり、ここでの空性論者の答論の根拠は「空なる言明は因果効力をもつ」ということである。また、第1偈は言明に因果効力がないことを主張するものであって、そのような第1偈への答論に六句議論への批判が含まれていることから、空性論者の論拠が読み取れるのではないだろうか。以上のように答論に基づいた場合でも、六句議論における実在論者の反論が、空なるものは非存在であり、すなわちいかなる結果も生み出さないことを前提としているのは明らかであろう。

## 5 Johnston 校訂本における第2句の訂正をめぐって

以上の考察結果を踏まえ、本項ではテキストの問題について論じよう。以下に問題となる第2句を再度挙げる。

【2】 *upapannaś cet punaḥ śūnyāḥ sarvabhāvā iti pratiśedhas, tena tvadvacanaśūnyatvād anena pratiśedho 'nupapannaḥ.*

【第2句】しかし、もし「すべてのものは空である」という否定が妥当であるならば、したがって、あなたの言明は空であるから、これ（言明）による否定は妥当ではない。

筆者は下線部を写本に従って読解したが、Johnston はどのような訂正を行っているのだろうか。

*tvadvacanam apy aśūnyam, aśūnyatvād* (Johnston1948-51: 110, 4)  
あなたの言明もまた空でない。空でないから [これ（言明）による否定は妥当ではない].

Johnston の訂正に従うと、和訳を挙げた通り言明は空でないことになる。しかし、前項で明らかとなったように、六句議論での實在論者の反論は「空なる言明は因果効力をもたない」ということを根拠としている。したがって、空ではないことを根拠に「否定が妥当でない」と帰結するべきではないはずである。また、第3句においても *aśūnya* という記述はみられるが、第3句の場合は「喩例との相違」があることを導出するための *aśūnya* であり、第2句でいわれる *aśūnya* とは、その機能が大きく異なっている。

では、なぜ Johnston はこのような訂正を行ったのか。Johnston が校訂にあたり参照したのは、[1] Sanskrit: *Sāṅkṛtyāyana* 校訂本 (1937), [2] Tibetan: Tucci 校訂本 (1929) および Yamaguchi (1929) のフランス語訳, [3] 漢訳：大正新脩大蔵経である。これらの資料における第2句を以下に挙げ、それぞれ Johnston の訂正と対応する箇所を下線を引いて示す。

*Sāṅkṛtyāyana* 校訂本：

*upapannaś cet, punaḥ śūnyāḥ sarvabhāvā iti pratiśedhas, tena tvad-  
vacanaśūnyatvād anena pratiśedho 'nupapannaḥ.*

(Vaidya1960: 310, 16-17)

Tucci 校訂本：

*gal te 'thad pa ma<sup>6)</sup> yin no zhes na / dngos po thams cad ni stong pa  
yin no zhes bkag pas des na khyod kyi tshig kyang stong pa yin la /  
stong pa nyid yin pa'i phyir des ni 'gog pa mi 'thad do //*

(Tucci1929: 5, 24-27)

Yamaguchi 仏訳：

Si ce n'est pas<sup>7)</sup> logiquement possible, d'après la négation: "Toutes les choses sont non-substantielles", ta parole sera donc aussi non-substantielle; puisque'elle est non-substantialité (*śūnyatā*), nier [les choses] avec cette [parole], ce n'est pas logiquement possible (*nopapadyate*) .

(Yamaguchi1929: 8, 10-15)

大正新脩大藏經：

又若相應言語能遮一切法體 一切法空語則不空語 若不空遮一切法則不相應  
 (大正新脩大藏經 No. 1631, 15c7-9)

チベット語訳は「空である (stong pa)」, 漢訳は「空でない (不空)」としている。Johnston 自身が註記においても言及する通り, 彼は漢訳を支持したということである。その一方で, Śāṅkṛtyāyana 校訂本が tvadvacanaśūnyatvād と簡潔な表現であるのに対して, Johnston がさらに apy aśūnyam の語句を補っている点については, チベット語訳を支持したともいえるだろう。つまり, Johnston は構文に関してはチベット語訳に従い, 意味は漢訳に従って該当箇所を訂正したということになる<sup>8)</sup>。

しかし, 前項までに明らかとなった実在論者の見解からすれば, 空でないことから「否定できない」という結論を導き出すような訂正は支持することができない。筆者が推測するに, Johnston の解釈は因果効力に論点が置かれる第 5 句以降の議論を先取りしてしまっているといえるのではないだろうか。

最後に, 上記以外の諸々のテキストおよび翻訳研究がどちらの読みを採用しているのか確認しておこう。なお, 翻訳研究については複数の言語にわたって行われているため, 表においては便宜上日本語で「空である／空でない」と表記した。原文については註を参照されたい。

Sanskrit		Tibetan		漢訳	
Manuscript	śūnya	sDe dge <sup>9)</sup>	stong pa	大正新脩大藏經	不空
Śāṅkṛtyāyana 1937	śūnya	Peking <sup>10)</sup>	stong pa	宮元 1999 <sup>11)</sup>	不空
Johnston 1948-51	aśūnya	Tucci 1929	stong pa		
Mookerjee 1957 <sup>12)</sup>	śūnya				

六句議論に関する研究		その他の翻訳研究	
原田 1976 <sup>13)</sup>	空でない	Yamaguchi 1929	空である
梶山 1984 <sup>14)</sup>	空でない	Tucci 1929 <sup>15)</sup>	空でない
石飛 2006 <sup>16)</sup>	空でない	山口 1950a <sup>17)</sup>	空である
石飛 2008 <sup>18)</sup>	空でない	梶山 1967 <sup>19)</sup>	空でない
		Bhattacharya 1978 <sup>20)</sup>	空でない
		Westerhoff 2010 <sup>21)</sup>	空でない

不空／asūnya の読みをとっているテキストは漢訳とそれに従った Johnston 校訂本のみであるにも関わらず、六句議論研究および翻訳研究は、空でないとするものが圧倒的に多い。この結果から、いかに Johnston 校訂本が標準とされてきたかが伺える。

しかし、山口（1950a: 11a2-3）は、漢訳『廻諍論』の「不空」の読みの誤りを「第二句論中の『語則不空，語若不空』と云ふ『不』は梵藏本には見られない。またその否定詞があつては論脈の妥当でないことも能く知られる。」と訂正している。『廻諍論』六句議論研究の出発点となつたはずの山口の指摘が、残念ながら重んじられることはなかった。このように、意味上の重大な差異をもたらす sūnya から asūnya への訂正が問題視されてこなかったこと、それこそが六句議論研究における最も大きな問題点なのではないだろうか。

## 6 結論

以上の考察から、Johnston 校訂本に見られる第 2 句の訂正は不要であると明らかになった。よって、Johnston 校訂本に従った既往の六句議論研究は見直さなければならない。しかしながら、先行研究が指摘する六主張議論や『方便心論』の六句議論との一致・相違は、今後の六句議論研究に大きく益するであろうことは確かである。今後解釈の問題を考察するにあたっては、他の先行研究と同様に各句の区切りや文の区切りも再検討する必要が生じてくる。そのため、六句議論の解明に至るには、『廻諍論』との同時代・後代

の別を問わず、より多くの議論、さらに文法的な背景をも考慮しなければならない。それらを広く参照、理解したうえで、最終的な考察が行われるべきであろう。

本稿では、六句議論の解明に向けた第一段階として、六句議論研究の根底に存していたテキストの問題を明らかにした。次なる課題として、まずはニヤーヤ学派の六主張議論との関係に着目し検討したい。

## 参考文献

### 一次文献

Sanskrit

*Vigrahavyāvartanī*: Johnston and Kunst, 1948-51, *Sāṅkṛtyāyana* 1937b, Mookerjee 1957, Yonezawa 2008.

*Vigrahavyāvartanī-vṛtti*: Johnston and Kunst 1948-51, *Sāṅkṛtyāyana* 1937b, Mookerjee 1957, Yonezawa 2008. The MS is reproduced in the *Facsimile Edition of a Collection of Sanskrit Palm-leaf Manuscripts in Tibetan dBu med Script*, published by Taisho University.

Tibetan

*Vigrahavyāvartanī-kārikā*: Toh 3828, Ota 5228; Tucci 1929. Yonezawa 2008.

*Vigrahavyāvartanī-vṛtti*: Toh 3832, Ota 5232; Tucci 1929. Yonezawa 2008.

漢訳

『廻諍論』1巻, 龍樹菩薩造, 後魏 三蔵毘目智仙共瞿曇流支訳, 大正新脩大蔵経 No. 1631; 宮元 1999.

### 二次文献

欧文

Bhattacharya, Kamaleswar. 1978. *The Dialectical Method of Nāgārjuna (Vigrahavyāvartanī)*. Delhi: Motilal Banarsidass.

Johnston, Edward Hamilton and Kunst, Arnold. 1948-1951. "The Vigrahavyāvartanī of Nāgārjuna with the author's commentary." *Mélanges chinois et bouddhiques* 9: 99-152.

- Mookerjee, Satkari. 1957. "The Absolutist's Standpoint in Logic." *The Nava-Nalanda-Mahavihara Reseach Publication* 1: 7-41.
- Sāṅkṛtyāyana, Rāhula. 1937. "Second Search of Sanskrit Palm-Leaf MSS. in Tibet." *Journal of the Bihar and Orissa Reseach Society* 23(1): 36.
- Sāṅkṛtyāyana, Rāhula and Jayaswal, Kashi Prasad. 1937. "Vigrahavyāvartanī by Ācārya Nāgārjuna." *Journal of the Bihar and Orissa Reseach Society* 23(3). Reprinted in Vaidya1960: 277-295.
- Tucci, Giuseppe. 1929. *Pre-Diñnāga Buddhist Texts on Logic from Chinese Sources*. Gaekwad's Oriental Series 49. Baroda: Oriental Institute.
- Vaidya, P. L. 1960. *Madhyamakaśāstra of Nāgārjuna, with the commentary: Prasannapadā by Candrakīrti*. Buddhist Sanskrit Texts 10. Darbhanga: Mithila Institute.
- Westerhoff, Jan. 2010. *The Dispeller of Disputes: Nāgārjuna's Vigrahavyāvartanī*. New york: Oxford University Press.
- Yamaguchi, Susumu. 1929. "Pour écarter les vaines discussions [Vigrahavyāvartanī]." *Journal Asiatique* 215: 1-36. Reprinted in 山口 1972.
- Yonezawa, Yoshiyasu. 2008. "Vigrahavyāvartanī Sanskrit Transliteration and Tibetan Translation." *Journal of Naritasan Institute for Buddhist Studies* (『成田山仏教研究所紀要』) 31: 209-333.

## 和文

- 石飛道子 2006 『龍樹造「方便心論」の研究』山喜房佛書林。
- 2008 『『六句論議』と『似因』をめぐる問題』『印度哲学仏教学』23: 226-245。
- 2010 『ブツダと龍樹の論理学—縁起と中道』サンガ。
- 稲見正浩 2012 「存在論—存在と因果」『シリーズ大乘仏教 9 認識論と論理学』春秋社, 49-90。
- 宇井伯寿 1965 「方便心論の註釈的研究」『印度哲学研究 2』岩波書店, 473-586。
- 梶山雄一 1984 「仏教知識論の形成」『講座大乘仏教 9 認識論と論理学』春秋社,



- 1-101.
- 2004 「廻諍論（論争の超越）」『大乘仏典 14 龍樹論集』中公文庫，139-191, 398-408. 初出：1967 『世界の名著 2 大乘仏典』中央公論社，231-267.
- 桂紹隆 2012 「仏教論理学の構造とその意義」『シリーズ大乘仏教 9 認識論と論理学』春秋社，3-48.
- 五島清隆 2008 「龍樹の仏陀観—龍樹文献群の著者問題を視野に入れて」『インド学チベット学研究』12: 137-169.
- 2012 「ナーガールジュナ作『十二門論』とその周辺」『シリーズ大乘仏教 6 空と中観』春秋社，43-66.
- 塚本啓祥他編 1989 『梵語仏典の研究Ⅲ 論書篇』平楽寺書店.
- 原田覚 1976 「*Ṣaṭkotiko vādaḥ* と *Ṣaṭpakṣīkathā*」『印度学仏教学研究』24(2): 63-67.
- 松本史朗 1997 『チベット仏教哲学』大蔵出版.
- 宮元啓一 1999 「新校訂本 漢訳『廻諍論』」『国学院大学紀要』37: 73-100.
- 山口益 1949 「廻諍論について」『密教文化』7: 1-19.
- 1950a 「廻諍論の註釈的研究（一）」『密教文化』8: 1-17.
- 1950b 「廻諍論の註釈的研究（二）」『密教文化』9-10: 1-20.
- 1950c 「廻諍論の註釈的研究（三）」『密教文化』12: 47-48.
- 1972 『山口益仏教学文集 上』春秋社.
- 米澤嘉康 1991 「『廻諍論』のテキストについて」『印度学仏教学研究』40(1): 412-410.

## 註

- 1) これまでナーガールジュナ真作として研究されてきた『廻諍論』であるが、現代の研究者からは疑義を呈す声も挙がっている。松本（1997: 149-154）は多くの根拠を挙げつつ、特に初期瑜伽行派の『菩薩地』への言及があることを指摘し、『廻諍論』は5世紀初頭の成立であるとする。また五島（2008: 155-156）は、自身が4世紀中頃成立と推測する『十二門論』の中に『廻諍論』を前提とする記述があることを根拠に4世紀

中頃までには成立していたとする。

しかし、ナーガールジュナの主著『根本中頌』や『方便心論』との内容的な繋がりから『廻諍論』の真撰を強く主張する石飛（2010: 225-247）のような研究者もあり、著者問題に関しては未だ確定的な議論を見ていない。そのため本稿では、『廻諍論』著者を「空性論者」あるいは、単に「著者」と呼称する。なお、「空性論者」という呼称は、『廻諍論』第69偈において著者が自称する“śūnyatāvādināṃ…”という記述に基づいている。

- 2) 偈頌の数え方は Johnston と Kunst による校訂本（1948-51）に従う。
- 3) Johnston と Kunst が共同で校訂し、Johnston の没後 Kunst によって出版されたテキストである（Johnston, Kunst 1948-51: 99）。本稿では Johnston 校訂本と略記する。
- 4) 原語は viśeṣahetu である。原田訳に従い表記したが、筆者はこの複合語を Karmadhāraya (viśeṣaḥ hetuḥ) ではなく、Locative の Tatpuruṣa (viśeṣe hetuḥ) で理解すべきと考える。筆者訳は第3項において提示する。
- 5) ダルマキールティ (Dharmakīrti, 法称, 600-660 年頃) が実在の定義として用いた“arthakriyā”に関する議論において、彼以前における類似の概念として度々言及される(桂 2012: 22-23, 稲見 2012a: 56-57 ほか)。直接的な関係はないと考えられるが、仏教論理学における“kāryakriyā”の用例や、ナーガールジュナ以降ダルマキールティ以前における当該概念についての解釈を含め、議論の余地があるだろう。検討の結果によっては、『廻諍論』成立年代の問題にも多少の影響を及ぼす可能性がある。この問題については別稿を期したい。
- 6) デルゲ版では脱落しているが(註9参照)、Tucci は北京版およびナルタン版のみを参照している。この通りに読めば、条件節が「否定が妥当でないなら」となってしまう、帰結となる「空である」との関係が逆転してしまう。この否定辞が附加された箇所も含め、Johnston 校訂本の解釈に影響を与えていると考えられる。
- 7) Tucci と同じく否定辞が附加されている。サンスクリット写本が発見さ

れたのちの山口の研究（1950a）では訂正されている（註 15 参照）。

- 8) ただし、チベット語訳の構文がサンスクリット写本と異なる理由と、漢訳が不空の読みをとる理由については、さらなる検討が必要である。以下はあくまで仮説であるが、現存のサンスクリット写本以前に “tvadvacanasya śūnyatvāt” とする写本があり、属格語尾の -sya が -pya と誤写されたということは考えられないだろうか。また漢訳に関しては同じ意味を論理的に逆方向から訳しており、この箇所に関しては逐語訳ではなく意識されているとみなせる。漢訳の六句議論については 6 句すべてを通して別途分析する必要がある。
- 9) “gal te 'thad pa yin no zhes na / dngos po thams cad ni stong pa yin zhes bkag pas des na khyod kyi tshig kyang stong pa yin la / stong pa nyid yin pa'i phyir des ni 'gog pa mi 'thad do // ” (D122a1-2)
- 10) “gal te 'thad pa ma yin no zhes na / dngos po thams cad ni stong pa yin no zhes bkag pas des na khyod kyi tshig kyang stong pa yin la / stong pa nyid yin pa'i phyir des 'gog pa mi 'thad do // ” (P139a6)
- 11) 「又若相応言語能遮一切法体，一切法空語則不空。（語若不空，遮一切法則不相応…（宮元 1999: 76, 13）」宮元は漢訳『廻諍論』について「原典を逸脱しているとしか考えようのない個所が非常に多」といって評価しており、（ ）内を訳者による付加であるとし、読むべきではないとしている（同 74, 9）。

なお、宮元は筆者とは異なる句の区切り方を採用しており、上記の箇所を第 3 句の一部と見なしている。代わりに、第 1 句末尾の「彼若遮言一切法空，則不相応。（同 76, 12）」を第 2 句に置く。第 1・2 句において句を区切る位置を変更する試みについては、石飛（2006, 2008）によっても行われている（註 14, 16 参照）。

- 12) Mookerjee は、Johnston 校訂本に対して若干の修正を加えている。“upapannaś cet punaḥ śūnyāḥ sarvabhāvā iti pratiśedhaḥ, tena tvadvacanam api (apyā?) śūnyam, (a) śūnyatvād anena pratiśedho 'nupapannaḥ.” (Mookerjee1957: 16, 3-4)
- 13) 原田は六句議論の各句の要点を簡略にまとめている。「若しも総ての

存在が空であり言葉が非空であるならば、否定は成立しない。(原田 1976: 974, 12-13)」

- 14) 「もし『すべてのものは空である』という否定がありうるならば、君の言葉は空でないはずである。空でないから、それによって否定するのは妥当でない。(梶山 1984: 30, 3-4)」
- 15) Tucci の英訳は、主に漢訳に基づいている。“Again, if it is true that the essence of all dharmas can be refuted by words, it follows that all dharmas are void, but words are not void. If words are not void [your] refutation of all dharmas is not valid. If dharmas are void, but words are not void, what [object] can be refuted by words?” (Tucci1929: 6, 11-16)

ただし、註には Tucci 自身が校訂したチベット訳テキストに基づく英訳も付されている。“[If you reply] that such a statement is not valid [and that your refutation holds good], then, on account of your refutation: “all dharmas are void,” your words also must be void. Inasmuch as they are void, no refutation is possible by them.” (Tucci1929: 24, 23-27)

- 16) 石飛は、六句議論を対論形式の議論へと書き換え、第 2 句を實在論者の反論とする。ただし、句を区切る位置を変更しており、第 1 句の末尾を第 2 句の一部として以下のように読んでいる。

この空であるもの (= 空論者であるあなたの言明) によって、否定はありえない。その場合、否定されるのは、「空であるのは一切のものなのである」であるが、それはありえない。

もし（「空であるのは一切のものである」という否定が）ありうるとするならば、これによって、しかし、あなたの言明は空ではないことになる。空でないのだから、この（あなたの言明）によって（「空であるものは一切のものである」という）否定はありえない。

(石飛 2006: 173, 6-10)

- 17) 山口は漢訳『廻諍論』の本文を挙げ、それに加えて Sāṅkṛtyāyana 校訂本とチベット語訳に基づく和訳を提示している。「爾るに若し理相應な

りと云はんか、[されど] 一切法は空なりと遮することなれば、それ故に汝の語も空なり。空性なるが故にそれによりて遮は不當なり（山口 1950a: 5b3-6）」

- 18) 石飛（2006）と同様の方法で対論形式への書き換えを行っている（註 14 参照）。

これ（= 空論者である「あなた」の言明）が空であることによって、否定はありえない。その場合、否定とは、すなわち「空であるのは一切のものなのである」であるが、それは起こりえない。

もし「空であるのは一切のものである」という否定が、起こってしまったとするならば、これによって、また、あなたの言明は、空ならざるものということになるだろう。空ならざるものであるから、この（あなたの言明）によって（「空であるのは一切のものである」という）否定はありえない。（石飛 2008: 241, 15ff.）

- 19) 梶山による和訳は Johnston 校訂本を底本とし、Mookerjee1957 およびチベット訳・漢訳を参照している。「もし『すべてのものは空である』という否定がありうるならば、君のことばは空でないはずである。空でない（ものが現にあるのだ）から、それによって（『すべてのものは空である』と）否定するのは妥当ではない（梶山 2004: 143, 9-11）」
- 20) Bhattacharya の英訳は Johnston 校訂本に基づいている。

“If, on the other hand, the negation that all things are void is valid, then your statement is non-void. [But] that negation which it establishes because it is non-void, is not valid (*aśūnyatvād anena pratiṣedho ’ nupapannaḥ*) ” (Bhattacharya1978: 6, 28-31)

- 21) Westerhoff の英訳は Johnston 校訂本、Yonezawa (2008) に基づいている。

“If, however, the negation “all things are empty” is accomplished, this implies that your assertion is also not empty. Because of the non-emptiness, the negation fails to be accomplished by this.”

(Westerhoff2012: 20, 27-29)

『廻詮論』六句議論における問題点